

表4. 言語的行動の因子分析の結果

	第1因子
1. 自分の気持ちを素直に表している	.796
2. 自分の経験を述べている	.833
3. 自分の言い分、考えを述べている	.830
4. 積極的に会話に参加している	.791
5. 相手に質問をしている	.479
6. 相手の陳述に対してコメントや反応をする	.662
7. 相手に対して同意の表情がみられる	.758
8. 相手に対して否定的である	.516
固有値	4.15
因子寄与率 (%)	51.89

表5. 非言語行動の因子分析の結果(バリマックス回転後)

	第1因子	第2因子	共通性
1. 声の大きさ	.456	.348	.329
2. 言葉の明瞭さ	.819	.105	.682
3. 言葉の速さ	.669	-.126	.464
4. 姿勢の前傾傾向	.649	.390	.573
5. 姿勢の後傾傾向	.080	.599	.366
6. 体の向き	-.070	.657	.436
7. 表情	.458	.491	.451
8. 身振り	.274	.557	.385
9. うつむき加減	.623	.314	.487
10. 視線	.281	.672	.532
固有値	2.51	2.19	4.70
寄与率 (%)	25.11	21.94	

被験者の自己報告に関する結果は表3. に示した。各従属変数ごとに高類似群と低類似群とで t 検定を行った。その結果、「雰囲気のを和らげるように振る舞った」($t(10) = 3.79$)、「相手の話の腰を折った」($t(10) = -3.10$)、「相手の言うことに何にでも反対した」($t(10) = -3.13$)、「相手にしらけた態度を示した」($t(10) = -2.66$)、「相手の意見を聞いてから発言した」($t(10) = 4.18$) で有意差が認められた。高類似群は低類似群よりも、雰囲気を和らげるように振る舞い (高・ $M = 2.67$ 、低・ $M = 1.67$)、相手の意見を聞いてから発言し (高・ $M = 2.75$ 、低・ $M = 1.88$)、低類似群は高類似群よりも、相手の話の腰を折り (高・ $M = 1.08$ 、低・ $M = 1.75$)、相手の言うことに何にでも反対し (高・ $M = 1.00$ 、低・ $M = 1.75$)、相手にしらけた態度を示すことが明らかになった。

4. 言語的行動ならびに非言語的行動の因子分析

言語的行動、非言語的行動が、どのような次元で分類されているのかを探るために、全ての観測変数を用いて因子分析を行った。言語的行動では固有値1.0を因子抽出基準としたところ、1因子抽出された。表4. のように「自分の経験を述べている」「自分の言い分、考えを述べている」「自分の気持ちを素直に表している」という項目に高く負荷した。これらは他者に対する自己開示に関連する項目であることから、この因子を自己開示性因子と命名した。また、非言語行動でも固有値1.0を因子抽出基準として2因子抽出され、バリマックス回転を行った。表5. のように、第1因子が高く負荷したのは「言葉の明瞭さ」「言葉の速さ」「姿勢の前傾傾向」であり、第2因子は「視線」「体の